

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K22006

研究課題名（和文）北海道における絶滅以前のエゾオオカミと人の関係性の再検討

研究課題名（英文）A Study of the Relationship between People and the Pre-Extinct Ezo Wolves (*Canis lupus hattai*) in Hokkaido

研究代表者

梅木 佳代 (Umeki, Kayo)

北海道大学・文学研究院・特任助教

研究者番号：70888750

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、歴史資料の調査と記録の集約・分析を通じて、絶滅以前のエゾオオカミと人々の関係性を再検討することを目的とする。従来、共存できていた時期の両者は平和裡・親和的な関係性を築いていたのではないかと想像されていたが、研究期間全体を通じて、人々が敵対的なオオカミ観を有していた可能性を示す事例が確認でき、とくに和民族（和人）の記録には、オオカミを「益獣」として信仰対象とみなす親和性や狼信仰とのつながりはあられなかった。本研究の遂行により、オオカミと間近に接しながら生活していた人々の感情や「狼害」発生時の防除対策の実際、幼獣の飼育が試みられていたことなど、過去の実態を幅広く解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、北海道における和民族とエゾオオカミの関係性がどのようなものだったか、はじめて具体的な解明に取り組むものである。

日本にかつて生息したエゾオオカミとニホンオオカミは明治時代に絶滅したが、とくに北海道のエゾオオカミは害獣駆除制度の対象とされ、強い狩猟圧を受けた結果として絶滅したことが知られている。人為的に引き起こされたことが明らかなエゾオオカミの絶滅は、その経緯を具体的に把握することができれば、日本人の動物観形成過程の解明に多くの示唆を与えることが可能となる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the relationship between the people of Hokkaido in the Meiji period and the Ezo wolf (*Canis lupus hattai*) before its extinction through the analysis of historical documents.

In previous studies, it was imagined that people and wolves had a peaceful and friendly relationship during the period when they were able to coexist. However, this study confirms that people basically had an alarmist attitude toward wolves.

In particular, the records of the Wajin did not show any affinity for the wolf as a beneficial animal or any connection to wolf worship.

研究分野：人と動物の関係史

キーワード：エゾオオカミ 野生動物 北海道 アイヌ民族 和民族（和人） 獣害 狩猟 飼育

1. 研究開始当初の背景

日本列島にかつて生息したエゾオオカミとニホンオオカミは、いずれも明治時代に絶滅した。このうち北海道に分布したエゾオオカミは、明治初期に制定された害獣駆除制度の対象とされ、強い狩猟圧を受けた結果として絶滅したことが知られている。絶滅にいたる具体的な状況や要因がほとんどわかっていないニホンオオカミに対し、人為的に引き起こされたことが明らかなエゾオオカミの絶滅は、その経緯を具体的に把握することができれば、日本人の動物観形成過程の解明に多くの示唆を与えうる、価値ある事例として位置づけられる。しかし、実態としては、絶滅が起きた時期の状況については掘り下げられているものの、いまだ人とエゾオオカミの関係性の全体的な解明には至っていない。

従来の先行研究は、絶滅以前のエゾオオカミと人々の関わりについて、共存できていた事実がある以上は平和裡で親和的なものだっただろうとする曖昧な前提を述べるにとどまってきた。この現状は議論に活用できる情報が不足してきたことに起因する。情報の不足については、すでに1930年代から指摘があり[犬飼哲夫 (1933) 植物及動物,(1)8:11-18]、それでいながらこれまで積極的な事例の拡充を目指した取り組みが行われてこなかったことに最大の問題があるといえる。

明治期以前の人々、とくに和民族(和人)とエゾオオカミの関わりについては、これまでほとんどわかっていない。北海道における人とエゾオオカミの関わりに言及する先行研究は、その多くがアイヌ民族とエゾオオカミの関わりに注目してきた。今後の研究の前提を適切に定め、新たな観点に立った議論の創出をはかっていくために、北海道における人とオオカミの関係性について、改めて全体的な検討に取り組む意義は大きい。

くわえて、オオカミは肉食性の陸獣として知られるが、近年ではカナダのプリティッシュコロンビア地方に魚食性の集団が存在することが明らかになり、その多様な生態と環境への影響力に関する議論が世界的に盛んになっている[Darimont, C. *et al.* (2008) BMC Ecology, 8:14]。エゾオオカミについても、海産物を主食とする集団が存在した可能性を指摘する研究がある[Matsubayashi, J. *et al.* (2017) Journal of Zoology, 302:88-93]。エゾオオカミの標本資料は少なく、化学分析的な手法を用いた生態解明には限界があるとされるが、文献調査を通じて科学・化学的研究の裏付けとなる情報を提供し、過去のオオカミの食性・生態復元に寄与できる可能性がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、歴史資料の調査と記録の集約を通じて絶滅以前のエゾオオカミと人々の関係性を再検討することにある。明治期以前の紀行文、報文、新聞など、当時オオカミと実際に遭遇した人々の思考や対応を知ることができる歴史資料から事例抽出を行い、人とエゾオオカミが共存できていたとされる時期の両者の関係性は「敵対」と「親和」のどちらを主軸とするものだったのか、また、そうした関係性には、時期あるいは地域的な差違・変化が存在したのかを検討する。

3. 研究の方法

本研究は、上記の背景および研究目的に基づき、明治期以前の人々とエゾオオカミの関係性解明を目指して、以下の調査・検討に取り組んだ。

- (1) 北海道立図書館が公開する「北の資料 132：北海道立図書館所蔵北海道市町村部落史誌目録」を基準とした道内自治体の史誌調査
- (2) 北海道内の公立図書館(旭川市中央図書館、旭川市末広図書館、旭川市永山図書館、旭川市東光図書館、旭川市神楽図書館、網走市立図書館、市立小樽図書館、帯広市図書館、釧路市中央図書館、新ひだか町図書館、苫小牧市立中央図書館、函館市中央図書館、根室市

図書館、余市町図書館、稚内市立図書館)における地域資料調査

- (3) 北海道大学附属図書館および函館市中央図書館が所蔵する『函館新聞』(北溟社)調査
- (4) 北海道立文書館の公開システム「公文書検索」を利用したキーワード検索結果を基本とする簿書調査
- (5) 上記の調査を通じて得られた情報を整理し、エゾオオカミとの遭遇・目撃時に当時の人々がどのような考え方や対応をしていたか(具体的には、遭遇時に人身ないし家畜被害を想定して防衛や被害防除のための行動をとったか、益獣あるいは無害な存在とみなして特別な対応を必要としなかったのか)、全体の傾向を把握
- (6) 前項までの結果を総合し、北海道の人とエゾオオカミの関係性について、時期・民族ごとの変化の有無、とくに従来議論の前提とされてきた、人とオオカミの関係性は明治維新を契機として変化したとする見解が適切かを検討

4. 研究成果

従来、北海道のエゾオオカミは、絶滅期以前には人々と平和裡・親和的な共存を果たすことができているのだろうと考えられてきたが、本研究では、道内でオオカミと遭遇・目撃した人々が敵対的な態度や認識をもっていたことを示す事例を多々確認した。とくに和民族の人々は、ヒグマと並ぶ大型肉食獣であるエゾオオカミの存在そのものを脅威とし、忌避すべき存在とみなしていたと考えられ、オオカミを無害あるいは利用価値のある「益獣」として扱うような親和的な事例は確認できなかった。本州以南にみられる「狼信仰」の根幹をなすとされる後者のオオカミ観は、明治期以前の北海道では存在したとしても非常に限定的だったと思われる。

エゾオオカミがもたらす脅威の実際、とくに人身被害の伝承は曖昧さが介在するが、間近に遭遇した場合には、基本的に「追い払い」が必要とされた様子がある。和民族では主として鉄砲を、アイヌ民族では火あるいは武器となりうる携行品を用いて退けていたと言及する事例がみられた。幕末期には、エゾオオカミとの遭遇を予期して陸路を避け、航路を選択していたとする例が存在する一方、人の側が馬上にある状況では脅威と感ずる度合いが減じるためか、乗馬を駆ってオオカミを追ったとする事例も確認できたが、おおむねエゾオオカミは人身被害をもたらす危険性がある大型野生動物として、人の行動や移動を制限し、ときに身近な生活域にまで侵入してくることが問題視される存在だった。

これまで不明確だった和民族とエゾオオカミの関係性については、オオカミが身近であることに価値や益が見出されておらず、むしろ人の側から積極的に追い払い、排除すべき存在とみなしていた様子があることから、主軸となるのは敵対的なオオカミ観であり、軋轢を事前に回避する形で共存を成立させていたといえる。

さらに、絶滅期に該当する明治期にも、「牛馬持ち」の人々がエゾオオカミによる家畜被害の損害を被っていたことは確かだが、実際には家畜・人身被害の有無にかかわらず、安全な生活域や居住環境の確保を優先してオオカミの追い払いが行われる場面が多々生じていた。地域によっては、移住者に先んじて猟師が現地に入り、周辺地域のオオカミ、ヒグマ、シカといった大型獣の捕殺を行っていたとする証言もみられた。それまでは銃を用いるとしても「追い払い」が主体だったのに対し、「捕殺」が可能となったことが全道のエゾオオカミの個体数減少に大きく影響したと考えられる。

その一方で、明治期にはエゾオオカミの幼獣を飼育していたとする記録も散見された。アイヌ民族・和民族のいずれの事例も詳細は不明確な場合がほとんどであり、駆除を進めるための手当金制度が存在する状況下だったことに鑑みると金銭的な価値を認めて確保する意図があった可能性も否定できないが、たとえ絶滅期であっても、エゾオオカミをめぐる状況や人々との関係性が多様であったことを示しているといえる。

エゾオオカミの飼育に関しては、とくに1877(明治10)年・1878年に函館支庁が確保して東

京・芝公園内に敷設されていた開拓使東京仮博物場へ移送、現地で飼育・展示されていた複数頭の幼獣をめぐる記録がまとまって残されていた。その中にはエゾオオカミの幼獣に「生魚」「魚肉」のほか「野犬」の肉を与えるとする記述がみられ、当時の人々がオオカミの食性をどのように認識していたのかがうかがえる。通常は魚類やイエイヌを捕食して生活しているとみなされていたオオカミが、人が所有する財産である家畜の牛馬を捕食しているように見える状況だったとすれば、人々の心情がオオカミの排除志向や敵対的なオオカミ観をより強める方向に影響した可能性も考えられる。エゾオオカミに対する一般的な認識はこれまでほとんど把握されずにいたが、当時の状況を具体的に解明するための基礎情報として重要であり、今後も集約に取り組む必要がある。

本州以南の人々とニホンオオカミの関係性をめぐる議論では、農作物を荒らすシカやイノシシを捕食する存在であるオオカミを「益獣」視することによって共存を果たしてきた面をもつとされ、各地にオオカミを神使・神獣と位置づける「狼信仰」が根付いていると述べられる。実際に、古河古松軒の「東遊雑記」にあらわれる、人々がオオカミを恐れず、むしろ遭遇した際には農作物を荒らすシカを追い払ってくれるよう声をかけていたとする描写が代表的な例として広く知られている。

一方、北海道でもシカやヒグマといった野生動物、また「野飼」の家畜馬による農作物被害が長いあいだ問題視されてきたことが確認できるが、そうした動物の捕食者・競合者にあたるエゾオオカミを「益獣」とみなす意識や、獣害防除を願うべき対象としてオオカミに言及している事例は見出すことができなかった。明治期以前の北海道に暮らしていた和民族の人々は、オオカミに対して親和的な認識を持ちにくい傾向があり、エゾオオカミは本州以南で多様な展開を見せる狼信仰と関連づけられる機会を与えられなかったといえる。本州以南と比較したときの大型野生動物の種数や生息数、また社会や産業形態のちがいなど、さまざまな要因の影響が考えられるが、オオカミに強く着目した場合、当時の和民族がアイヌ民族に対し「獣ごとき」[大内餘庵 1860(1972)「東蝦夷夜話」大友喜作『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』国書刊行会]を神とみなす人々であるとする差別的な認識を有していたこととの関わりも重視する必要があると考えている。

本研究は、文献調査と記録の集約・分析により過去の北海道における人とオオカミの関係性の再検討に取り組むものであり、結果として対象とした歴史資料は史誌や簿書をはじめ、和民族による記録が主体となった。これまでは和民族の人々とエゾオオカミの関わりがほとんどわかっていなかったため、研究成果としてこの点を明らかにできた功績は大きく、また和民族からみたアイヌ民族とエゾオオカミの関係性を把握することにもつながったといえるが、一方で、アイヌ民族自身による記録や情報を十分に収集して検討対象に含めるにはいたらなかった。今後、視点や認識の偏りを可能なかぎり避け、相互の影響関係を検討することを可能とするためには、対象とする歴史資料の範囲を広げ、情報の拡充を目指していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 梅木佳代	4. 巻 20
2. 論文標題 開拓使東京仮博物館で飼育されたエゾオオカミの記録	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北海道民族学	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 梅木佳代
2. 発表標題 明治初期の札幌近郊地域におけるエゾオオカミの出没記録
3. 学会等名 「野生生物と社会」学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梅木佳代
2. 発表標題 明治時代に東京仮博物館で飼育されたエゾオオカミ
3. 学会等名 日本哺乳類学会・2023年度大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梅木佳代
2. 発表標題 明治期の『函館新聞』にみる人々とエゾオオカミの関わり
3. 学会等名 「野生生物と社会」学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梅木佳代
2. 発表標題 近代北海道においてオオカミに向けられた態度と認識
3. 学会等名 北海道民族学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 関根達人, 菊池勇夫, 手塚薫, 北原次郎太	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 708
3. 書名 アイヌ文化史辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

講演「オオカミトークショー（一般の部）北海道内の公立動物園におけるオオカミの飼育記録」および「オオカミトークショー（こどもの部）北海道に野生のオオカミがいたの？ 動物園のオオカミはどこから来たの？」2023年5月21日、札幌市円山動物園.

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関